

大学生における対人的傷つきやすさに関する研究

— 対人的成功・失敗場面での原因帰属との関連から —

平松佳子

I. 問題と目的

青年期は対人関係の比重が親子関係から友人関係へと移行していく時期であると言われ、依存的な関係であった両親から心理的な分離をし、より広い他者との関係へと導かれていく。しかし、近年、傷つくことを恐れるために他者と深く関与できず、自分も相手も傷つきやすい存在であることが前提とされた人間関係をもつ（大平、1995）など「傷つきやすい」青年の姿が報告されている。本研究の目的は、青年の「傷つきやすさ」について検討することである。

「傷つく」という状態は、対人場面におけるストレスがきっかけとなって自分の内部におこるネガティブな反応であると考えられる（馬場、2000）。ラザルスとフォルクマン（1991）はストレス研究において、「傷つきやすさ（vulnerability）」を「ストレスフルなある種の状況に反応する個人のレディネス」であるとしている。どのようなことに青年は傷つきやすいのか自己評価式に調査した研究（浜崎、1999；馬場、2000）、「傷つきたくない」という自己評価の意識が青年男女とも「人の反対が心配」や「少しでもよく見られたい」という意識と関連しているという指摘（梶田、1988）等から、青年の「傷つきやすさ」は他者の言動への過敏性や、他者との関係の中での自分の姿への悩みと関係していると考えられる。そこで、本研究では、青年の他者との関係における「傷つきやすさ」を「対人的傷つきやすさ」とし、『「人が自分をどう思うか』など、他者との関係の中での自分を意識しやすく、他者の言動や反応に敏感であり、対人的ストレス状況においてネガティブな感情の起こりやすいこと」と操作的に定義し調査をする。

対人的に傷つきやすい人は他者との相互作用に敏感であると考えられる。よって、他者との関係の受け止め方、すなわち対人的場面での認知様式について検討することが必要であると考えられる。そこで、本研究では、認知様式の一つとして原因帰属スタイルとの関連から「対人的傷つきやすさ」を検討する。特に、他者との関係における成功場面、失敗場面における原因帰属スタイルに着目して検討することとする。対人的傷つきやすさが不適応につながらないためにも、他者との関係における失敗、成功場面の受け止め方を検討することは必要であり、臨床的介入の視点も得られるであろう。以上のような認知

の視点に合わせて、不適応傾向、自己評価との関係から、「対人的傷つきやすさ」の概念を再び描き出すことによって、対人的に傷つきやすい人とはどういう人であるのかを検討することを目的とする。

II. 研究1

1. 目的

「対人的傷つきやすさ」を測定するために、対人的傷つきやすさ尺度を作成すること、また「対人的傷つきやすさ」と不適応傾向との関係を検討すること。

2. 方法

【調査対象および手続き】2002年7月下旬に、大学生92名（男性35名、女性57名）を対象に質問紙調査を実施した。

【質問紙の構成】①対人的傷つきやすさ尺度：「対人的傷つきやすさ」の定義に従って、対人恐怖的心性尺度（永井、1994）、他者意識尺度（辻、1993）の下位尺度から広範に項目が集められ作成されたもの、②不適応傾向尺度（倉本ら、1999）。

3. 結果と考察

対人的傷つきやすさ尺度の因子分析結果から「対人的自信喪失」「自己批判性」「評価過敏」「他者想像」「感情動揺」「言動への注意」の6つの下位尺度が得られた。対人的傷つきやすさ尺度と不適応傾向尺度との相関から、対人的傷つきやすさは全体として内向的な不適応との間に正の相関関係がみられた。すなわち、対人的傷つきやすさの高い人は、抑うつ的になる傾向、他者との関係を避けるような内向的な不適応傾向があることが示された。

III. 研究2

1. 目的

「対人的傷つきやすさ」と対人的な成功・失敗場面での原因帰属スタイル、自己評価との関係を調査し、「対人的傷つきやすさ」の概念を再検討することを目的とする。

2. 方法

【調査対象および手続き】2002年11月上旬～中旬にかけて、大学生203名（男性124名、79名）を対象に質問紙調査を実施した。

【質問紙の構成】①研究1で作成された対人的傷つきや

すさ尺度, ②原因帰属スタイル測定尺度(村上, 1989): 原因が自分に関わるかそうでないかという「LOCUS」次元, 原因が常にあるかそうでないかという「STABLE」次元, 原因が他の事にも影響するかそのことのみに影響するかという「GLOBAL」次元, その状況をコントロールできるかどうかという「CONTROL」次元の4次元からなる, ③自己評価尺度(山本・松井・山成, 1982)。

3. 結果と考察

【相関分析】対人的傷つきやすさ尺度と原因帰属スタイルの各次元との間には, 場面により異なる相関関係がみられた。すなわち, 成功場面では, 対人的傷つきやすさ全体と「CONTROL」次元との間に弱い負の相関が見られたものの, その他の次元との間には有意な相関は見られなかった。それに対して, 失敗場面では, 「LOCUS」次元とは有意な負の相関, 「STABLE」「GLOBAL」次元とは有意な正の相関, 「CONTROL」次元とは無相関という関係が見られた。よって, 対人的傷つきやすさは, 成功場面における原因帰属スタイルとの関係よりも, 失敗場面における原因帰属スタイルとの関係が強いと考えられた。すなわち, 失敗場面において, 対人的傷つきやすさの高いほど, その失敗が内在していると帰属しやすく, その失敗の原因は安定的であると考え, その原因は普遍的であると考えられる傾向があると示唆された。自己評価は対人的傷つきやすさと高い正の相関が見られたが, 対人的傷つきやすさとは異なり, 成功場面における原因帰属スタイルと正の相関関係が見られた。

【分散分析】対人的傷つきやすさ高群, 低群において, 原因帰属スタイルの4次元別に2群×場面の原因帰属スタイル尺度得点の分散分析を行った。分散分析の結果, 「LOCUS」「STABLE」「GLOBAL」次元のいずれにおいても, 成功場面では対人的傷つきやすさ高群と低群で得点の差は見られなかったが, 失敗場面では有意な得点の差が見られた。すなわち, 「LOCUS」次元では, 失敗場面において, 対人的傷つきやすさ高群の人は原因帰属スタイル得点が低く, 低群の人に比べて失敗場面を内的に帰属することが考えられた。「STABLE」次元では, 失敗場面において, 対人的傷つきやすさ高群の人は原因帰属スタイル得点に変化は見られないが, 対人的傷つきやすさ低群の人は得点が低く, その原因は将来まで続かないと考えるという方向への変化が見られた。

「GLOBAL」次元も同様に, 失敗場面において, 対人的傷つきやすさ高群の人は原因帰属スタイル得点に変化は見られないが, 対人的傷つきやすさ低群の人は得点が低くなっており, その原因はその領域に限られると考えるという方向への変化が見られた。

以上のことから, 成功場面では, 対人的傷つきやすさの高い人も低い人も同様に, 原因の帰属の方向性, 次の成功の予測, 成功原因の他の領域への広がりには差は見られないが, 失敗場面において, 対人的傷つきやすさの高い人は, 内的に自分に帰属する程度が高くなるため, 失敗場面において自己を防衛することができず, その影響をより大きく受けることが示唆された。また, 対人的傷つきやすさの低い人は, 対人的傷つきやすさの高い人に比べて, 失敗場面での原因は続かないだろう, 他の領域にまで影響を及ぼすものではないと考え, その原因の影響力を小さく考える傾向がみられる。それに対して, 対人的傷つきやすさの高い人は, その原因の影響力を小さく考えるという方向に認知のスタイルを変化させることができないことが示唆された。そのため, 次の失敗をも予測することにつながり, 失敗場面における傷つきの悪循環から抜け出しにくくなると予想された。

IV. 総合的考察

他者との関わりの中では, 様々なことが起きるだろう。斉藤(1998)が「本当の意味で重要な他者との出会いは, どこか必然的に外傷性を帯びてしまう」と述べているように, 他者との関係がうまくいかないときも必ずあるだろう。そのような中で精神的健康を保ちながら生きていくには, 認知のあり方を変化させ, その原因は自分にあるとは限らず, その原因は続かないだろうと未来に対して期待しながら, 自己を守る必要があると考えられる。

本研究の結果からは, 対人的傷つきやすさの高い人は, そのような他者との関係における失敗から自己を守れないため, 精神的な健康を保つことが困難な人であると示唆された。そのため, 対人的傷つきやすさの高い人は自己評価が低くなり, 引きこもりや抑うつなどの不適応状態へつながると考えられた。また, 臨床的介入の視点から面接において, 対人的傷つきやすさの高い人に対して他者との関係の失敗場面を取り上げる必要性, 自己評価の低い人に対しては成功場面を取り上げることの有効性が考察された。